

子どもの頃の読書経験と学歴の関係性

小倉茉奈佳・河野彩会子・小滝真悠
(東北大学教育学部)

1 背景と問題関心

文化庁の2023年度「国語に関する世論調査」によると、16歳以上の国民のうち、6割以上が1か月に本を「読まない」と回答した。調査方法は異なるが、2008年度や2013年度、2018年度の参考値は4割台後半であることから、習慣的に読書をしない人が増加傾向にあると推測される。一方で、先行研究（学習意欲の科学的研究に関するプロジェクト2020）において、読書を含む生活習慣が仙台市の中学3年生の学力に影響していることが明らかにされている。さらに、松崎（2021）の研究では、放課後における読書や学習習慣が文章理解成績に直接関与していることが指摘されている。このように、読書習慣が中学校3年間の学力形成に与える影響や、文章理解成績との直接的な関連性を示す研究は存在している。しかし、先行研究では、読書習慣が最終学歴に与える影響については解明されていない。先行研究（学習意欲の科学的研究に関するプロジェクト2020）において、読書時間と図書館利用頻度に関する調査が行われているが、これらと最終学歴の関係は明らかにされていない。そこで、本研究では、読書量（読書冊数・読書時間）および図書館利用頻度と最終学歴との関係を明らかにすることを目的とする。日本では「読書離れ」が進んでいる傾向にあるが、読書が結果的に最終学歴に与える影響を分析することで、読書の新たな価値を検討する。

2 仮説の設定

以上の問題関心をもとに、本研究では2つの仮説を立てた。

仮説1：読書量（読書冊数・読書時間）が多いほど学歴は高くなる

橋本（2024）の研究では語彙調査と学力調査のかかわりから、得点の高い児童の語彙認識度は高く、1ヶ月あたりの読書冊数も多いことが分かっている。このことから読書冊数が語彙認識度や学力に関係していることが示唆される。また、仙台市が行なった学習意欲の社会的研究に関するプロジェクト（2020）では読書を含めた生活習慣が仙台市の中学3年生の学力に関係していることが明らかになっており、読書時間と学力には関係があることが分かっている。これを踏まえて本研究では読書量（読書冊数や読書時間）と学歴の関係性を分析する。

仮説2：読書習慣が学歴に影響する

先行研究では、平日における一定時間の読書が学力に影響していることや、計画的な勉

強ができない子ほど、読書時間を確保できない（文部科学省, 2009）といったことが分かって庵、読書習慣の有無が学力に影響していることが示唆されている。また、図書館頻度が高ければ学力が高いわけではないが、学校司書等がいる場合は学力が高い傾向にある（文部科学省, 2009）ことも分かっている。加えて、仙台市が行なった学習意欲の社会的研究に関するプロジェクト（2020）では読書習慣として図書館利用頻度を扱っており、学力向上のための読書習慣の重要性が示されている。そこで、本研究では、読書冊数、読書時間、図書館利用頻度からなる読書習慣と学歴との関係性を分析する。

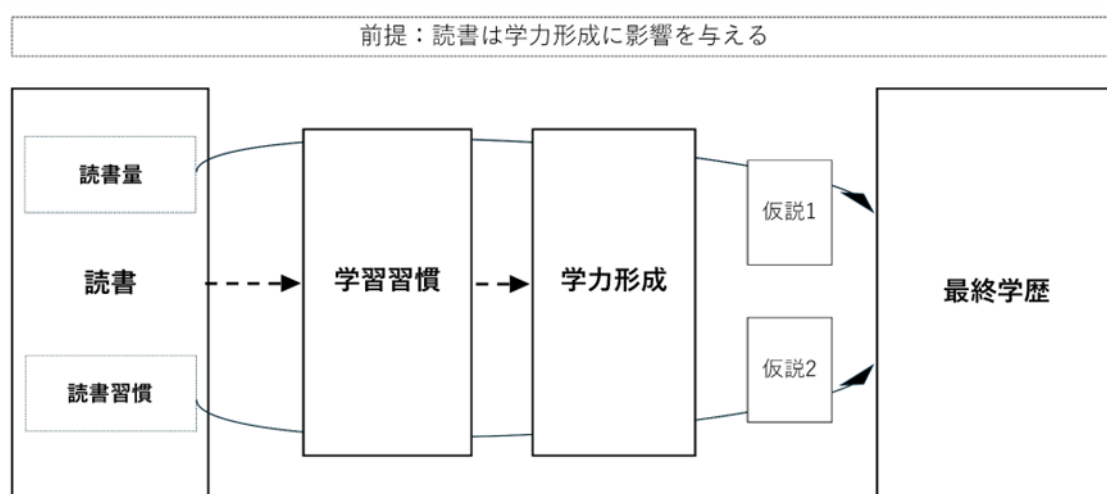


図1：分析枠組

3 使用するデータと分析方法

3.1 使用するデータ

データは、東北大学教育学部が行った「若年者のライフスタイルと意識に関する調査」で収集したものである。調査対象者は学生を除く日本在住の20歳以上40歳未満の男女とし、郵送法によってデータ収集を行った。サンプル数は600、うち有効回答数は558で93.0%であった。

3.2 使用する変数

2004年度文部科学省委託事業「親と子の読書活動等に関する調査」の調査票を基に、変数を設定した。

小学生、中学生、高校生の頃の1ヶ月あたりの読書冊数について、質問紙では「1:0冊」「2:1・2冊」「3:3-5冊」「4:6-10冊」「5:11冊以上」の5つの選択肢から尋ねている。また、1ヶ月の読書冊数が0冊であるものを0、1冊以上であるものを1としてダミー変数を作成した。

小学生、中学生、高校生の頃の1日あたりの読書時間について、質問紙では「1:0分」

「2:30 分くらい」「3:1 時間くらい」「4:2 時間くらい」「5:3 時間くらい」「6:3 時間以上」の6つの選択肢から尋ねている。また、1日の読書時間が0分であるものを0、1分以上であるものを1としてダミー変数を作成した。

また、各学校年代の読書時間と読書冊数の和を求め新たな変数を作成し「読書量」とした。

小学生、中学生、高校生頃の図書館利用頻度について、質問紙では「1:ほとんど毎日」「2:週に2・3回」「3:週に1回」「4:月に2・3回」「5:月に1回」「6:3ヶ月に1回」「7:半年に1回」「8:年に1回」「9:ほとんど行かない」の9つの選択肢から尋ねている。分析においては、1～9の数値を逆転させた。また、図書館にほとんど行かないとしたものを0、その他の回答を1としてダミー変数を作成した。

最終学歴について質問紙では回答者本人とその父親、母親に対して「1:小学校・中学校・中等教育学校」「2:高等学校」「3:高等専修学校」「4:短期大学」「5:高等専門学校」「6:専門学校」「7:大学」「8:大学院」「9:その他」の9つの選択肢から尋ねている。最終学歴について、大学、大学院卒を主眼としているため、「大学、大学院卒」を1、それ以外の最終学歴を0としてコーディングした。

世帯年収について、質問紙では「1:300万円未満」「2:300万円以上700万円未満」「3:700万円以上1000万円未満」「4:1000万円以上1500万円未満」「5:1500万円以上2000万円未満」「6:2000万円以上」の6つの選択肢から尋ねている。

基礎分析の結果は以下の表1から表16の通りである。

表1 記述統計表

項目		N	最小値	最大値	平均値	分散	標準偏差
読書冊数	小	557	1	5	2.39	1.22	1.10
	中	556	1	5	1.97	.84	.92
	高	551	1	5	1.79	.90	.94
読書時間	小	557	1	6	2.29	1.16	1.08
	中	557	1	6	1.95	.89	.94
	高	551	1	6	2.01	1.68	1.29
図書館利用頻度	小	557	1	9	5.12	6.61	2.57
	中	556	1	9	3.45	6.95	2.63
	高	550	1	9	2.92	6.12	2.47
読書時間合計		549	3	51	6.23	6.72	2.59
読書冊数合計		548	3	52	6.15	6.05	2.46
読書量		548	6	52	12.39	22.75	4.77
父親学歴		556	1	9	4.58	6.74	2.59
母親学歴		557	1	9	3.91	4.42	2.10
本人学歴		558	1	8	5.19	5.10	2.25
世帯年収		552	1	6	2.53	.95	.97

表2 父親学歴の度数分布

学校種	度数（人）	パーセンテージ（％）
小中学校	27	4.9
高校	227	40.8
高校専修	6	1.1
短大	7	1.3
高専	15	2.7
専門学校	36	6.5
大学	194	34.9
大学院	26	4.7
その他	18	3.2
合計	556	100

表3 母親学歴の度数分布

学校種	度数（人）	パーセンテージ（％）
小中学校	22	3.9
高校	233	41.8
高校専修	5	.9
短大	101	18.1
高専	18	3.2
専門学校	78	14.0
大学	92	16.5
大学院	3	.5
その他	5	.9
合計	557	100

表4 本人学歴の度数分布

学校種	度数 (人)	パーセンテージ (%)
小中学校	22	3.9
高校	125	22.4
高校専修	3	.5
短大	59	10.6
高専	17	3.0
専門学校	71	12.7
大学	221	39.6
大学院	40	7.2
合計	558	100

表5 世帯収入の度数分布

世帯収入	度数(人)	パーセンテージ(%)
300万円未満	44	8.0
300万円以上 700万円未満	278	50.4
700万円以上 1000万円未満	153	27.7
1000万円以上 1500万円未満	58	10.5
1500万円以上 2000万円未満	7	1.3
2000万円以上	12	2.2
合計	552	100

表6 父親学歴ダミーの度数分布

父親学歴ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	336	60.4
1.00	220	39.6
合計	556	100

表7 母親学歴ダミーの度数分布

母親学歴ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	462	82.9
1.00	95	17.1
合計	557	100

表8 小学校読書冊数ダミーの度数分布

小学校読書冊数ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	109	19.5
1.00	449	80.5
合計	558	100

表9 中学校読書冊数ダミーの度数分布

中学校読書冊数ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	178	31.9
1.00	380	68.1
合計	558	100

表10 高校読書冊数ダミーの度数分布

高校読書冊数ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	251	45.0
1.00	307	55.0
合計	558	100

表 11 小学校読書時間ダミーの度数分布

小学校読書時間ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	121	21.7
1.00	437	78.3
合計	558	100

表 12 中学校読書時間ダミーの度数分布

中学校読書時間ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	191	34.2
1.00	367	65.8
合計	558	100

表 13 高校読書時間ダミーの度数分布

高校読書時間ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	273	48.9
1.00	285	51.1
合計	558	100

表 14 小学校図書館利用頻度ダミーの度数分布

小学校図書館利用頻度ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	117	21.0
1.00	440	79.0
合計	557	100

表 15 中学校図書館利用頻度ダミーの度数分布

中学校図書館利用頻度ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	263	47.3
1.00	293	52.7
合計	556	100

表 16 高校図書館利用頻度ダミーの度数分布

高校図書館利用頻度ダミー	度数(人)	パーセンテージ(%)
.00	310	56.4
1.00	240	43.6
合計	550	100

4. 分析結果

4.1 仮説 1：読書量が多いほど学歴は高くなる

表17 読書冊数と読書時間の相関係数

		読書冊数			読書時間		
		小	中	高	小	中	高
読書冊数	小		.547**	.371**	.683**	.436**	.279**
	中			.641**	.480**	.776**	.463**
	高				.335**	.536**	.645**
読書時間	小					.591**	.256**
	中						.440**
	高						

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

学校年代ごとの読書冊数と読書時間には 0.1%水準で強い相関関係が認められる。このことから、これまでの読書経験がそれ以降の読書冊数や時間に影響していることが示唆された。また、同学校年代での読書冊数と時間には 0.1%水準で 0.5 以上の高い相関関係が認められている。このことから読書冊数と読書時間には強い関係性があることが分かる。

仮説 1 を検証するために、相関分析を行った。その結果、学歴と読書時間、学歴と読書冊数、学歴と読書量総合得点においては有意な相関関係は見られなかった。また、世帯年収や両親の学歴を制御した場合の相関も検討したが、学歴と読書時間、学歴と読書冊数、学歴と読書量総合得点の間に有意な関連は認められなかった。

表18 最終学歴と読書の相関係数

		読書時間	読書冊数	読書量
最終学歴	制御前	.078	.081	.083
	制御後	.047	.049	.051

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

制御：世帯年収・父親の学歴・母親の学歴を制御

4.2 仮説 2：読書習慣が学歴に影響を与える

まず、図書館利用頻度と学歴の関係性について検証した。

結果は以下の表 19 の通りである。

表19 図書館利用頻度と最終学歴の相関

	図書館利用頻度		
	小	中	高
本人学歴ダミー	.026	-.066	-.136**

* : $p < .05$ ** : $p < .01$

高校の図書館利用頻度と学歴にのみ 0.1%水準で有意な関係性が認められたが、相関は極めて弱いことが分かった。よって図書館利用頻度が高いほど学歴は高くなることは考えづらく、高校の図書館利用頻度が低いほど学歴が高くなる傾向があることが示唆された。

次に、読書習慣の有無と学歴の関係性について検証した。その際、読書冊数については1ヶ月の読書冊数が0冊であるものを0、1冊以上であるものを1として、読書時間については1日の読書時間が0分であるものを0、1分以上であるものを1として作成したダミー変数を用いて分析を行なった。

高校の頃の読書冊数、読書時間がともに学歴と有意な関連性が認められた。特に高校の読書冊数については相関係数は0.124であり、1%水準で有意な結果となっている。相関係数は決して大きな値とは言いがたいが、高校の頃に本を読むか読まないかという読書習慣の有無が、学歴に有意に関係していることが示唆される。

さらに、読書習慣としての図書館利用の有無と学歴の関連性について検証した。その際、図書館にほとんど行かないとしたものを0、その他の回答を1としてダミー変数を作成し、分析を行なった。

表20 読書習慣の有無と最終学歴の相関係数

		本人学歴 ダミー	読書冊数ダミー			読書時間ダミー		
			小	中	高	小	中	高
本人学歴ダミー			-.074	.055	.124**	-.083	.062	.097*
読書冊数 ダミー	小			.468**	.209**	.838**	.464**	.205**
	中				.448**	.489**	.916**	.407**
	高					.224**	.441**	.909**
読書時間 ダミー	小						.528**	.242**
	中							.450**
	高							

* : p<.05 ** : p<.01

高校の頃の読書冊数、読書時間がともに学歴と有意な関連性が認められた。特に高校の読書冊数については相関係数は0.124であり、1%水準で有意な結果となっている。相関係数は決して大きな値とは言いがたいが、高校の頃に本を読むか読まないかという読書習慣の有無が、学歴に有意に関係していることが示唆される。

さらに、読書習慣としての図書館利用の有無と学歴の関連性について検証した。その際、図書館にほとんど行かないとしたものを0、その他の回答を1としてダミー変数を作成し、分析を行なった。

結果は以下の表21のとおりである。

表21 最終学歴と図書館利用頻度の相関関係

		本人学歴 ダミー	図書館利用頻度ダミー		
			小	中	高
本人学歴ダミー			-.020	.063	.153**
図書館利用頻度 ダミー	小			.476**	.249**
	中				.592**
	高				

* : p<.05 ** : p<.01

高校の図書館利用の有無と学歴において有意な関連性が認められた。相関係数は0.153であり1%水準で有意な結果となっている。したがって、高校生の図書館を利用するかし

ないかという図書館利用習慣の有無が、学歴に有意に関係していると言える。

4.3 分析結果まとめ

仮説1を検証した結果、学歴と読書時間、学歴と読書冊数、学歴と読書量総合得点の間に有意な関連は認められなかった。したがって、仮説1は成立しなかった。

仮説2を検証した結果、高校の頃の読書冊数、読書時間がともに学歴と有意な関連性が認められた。相関係数は大きな値とは言い難いが、高校の頃に本を読むか読まないかが、学歴に有意に関係していることが分かった。

5 まとめと課題

5.1 得られた知見

以上の結果から得られた知見は、主に二点ある。

第一に、学歴と読書量にはわずかながら有意な関係性が認められる点である。仮説1の分析より、学歴と読書量には有意な関係性が認められるものの、その関係性は弱い傾向にあることが明らかになった。つまり、読書量が学歴に対して直接的かつ大きな影響を与えるわけではない。この結果より、子どもの頃の読書量が多いこと自体が高い学歴につながるのではなく、読書への抵抗の有無が学習への抵抗の有無と関連している可能性があると考えられる。読書を通して、長時間机に向かったり、1つの作業に集中して取り組んだりする力が養われ、学習にも生かされていると推測される。

第二に、高校生の頃の読書習慣が学歴と有意に関係している点である。仮説2の分析より、高校生の頃の読書冊数や読書時間、図書館利用の有無が学歴と有意な関連性があることが確認された。また、小学生の頃に読書や図書館利用をしている人は、中学校、高校においても継続していることが分かっている。この結果より、小学生の頃に読書や図書館利用をしていた人は、その習慣が定着し、中学・高校でも継続して読書をしたり、図書館を利用したりしていたと考えられる。また、読書や図書館の利用が習慣化していた人は、文字を読むことや机に向かうことに対する抵抗が少なく、結果として学習習慣が形成されやすいと考察できる。

5.2 本研究のまとめ

以上の分析を踏まえて、本研究のまとめを以下に述べる。

読書習慣と最終学歴の関係に関して、読書習慣が最終学歴と直接の関連が強いとは言い難い。しかし、読書習慣がある子どもは、文字を読むことや机に向かうことに対して抵抗が少なく、学習習慣につながりやすいと考える。読書習慣と学歴の直接的な関連は見られなかったが、読書習慣が学習を行うための動機の一つであると考えられる。

5.3 本研究の課題と今後の展望

本研究では、回答者が、小学生、中学生、高校生の頃を思い出して調査票を記入しているため、実際とは異なっている可能性があることが課題として挙げられる。また、学習漫画については調査の対象外としたため、学習漫画が与える影響について、考察の余地が残る。さらに、電子書籍や図鑑なども学歴に影響を及ぼす一要因となることも想定される。したがって、今後、電子書籍と学歴の関係、学習漫画や図鑑をはじめ他のジャンルの本と学歴の関係についても更なる検討が必要である。

文献

- 仙台市, 2020, 「学習意欲」の科学的研究に関するプロジェクト」(2025年1月30日取得, <https://www.city.sendai.jp/manabi/kurashi/manabu/kyoiku/inkai/kanren/kyoiku/project.html>).
- 橋本京子, 2024, 「【実践報告】保幼小と連携した読書活動の推進-豊かな心と確かな学力の育成のために-」『地域協働研究ジャーナル』第3集, 京都文教大学地域協働研究教育センター.
- 文化庁, 2024, 「令和5年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」(2025年2月14日取得, https://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/94111701.html).
- 松崎泰, 2021, 「生活習慣や学習環境と学習支援」コミュニケーション障害学 38, pp. 57-60 「子供の読書活動に関する現状と論点」.
- 文部科学省, 2004, 「親と子の読書活動等に関する調査」(2024年7月16日取得, https://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/tosho/houkoku/05111601.htm).
- 文部科学省, 2017, 「子供の読書活動に関する現状と論点」(2024年7月16日取得, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/040/shiryu/1389071.htm).